

## 待降節第四主日

2009.12.20

ミカ書 5・1-4a

ヘブライ人への手紙 10・5-10

ルカによる福音 1・39-45

クリスマスも間近に迫った待降節第四主日の今日の福音は、天使のお告げを受けた聖母がエリザベトを訪問される場面です。

「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」エリザベトの口を通して聖母マリアにささげられたこの賛辞は、私たちが聖母のもとに呼び集め、聖母とともにクリスマスの神秘を味わうよう招いています。

聖書が語るクリスマスの神秘の中心は、主がおっしゃったこと、つまり神の約束のことばが、救い主イエス・キリストの誕生によって、この私たちの世界の歴史の中に実現したということです。このことを祝うのがクリスマスの祝いです。

マタイ福音書の2章に語られているイエスの誕生物語を見ると、今日の第一朗読のミカ書における神のことばの実現として描かれていることが分かります。ベツレヘムはもはや、かつての偉大なメシア王ダビデの出生の地として記憶にとどめられるだけではありません。ダビデがその前表であった、その「出生は古く、永遠の昔にさかのぼると」ミカ書に示されている、真のメシア、神の子イエス・キリストの誕生の地となったのです。

「私は主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように。」天使ガブリエルの口を通して告げられた、神のことばを受け入れた聖母マリアのこの応えは、今日の第二朗読のヘブライ人への手紙の新約の大祭司キリストのことばと響きあっています。「あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろわたしのために体を備えてくださいました。」聖母の胎内に宿られた方は、母マリアがそうであるように、神のことばがその身に実現するために、マリアの子としてこの世に来られたのです。「ご覧ください。わたしは来ました。聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、神よ、御心を行うために。」神のことばが実現するためにわが身を提供し、神の御心のままにささげたこの母子によって、ミカ書が告げた、神の救いのみわざが実現したのです。「まことに、主は彼らを（イスラエルを）捨ておかれる。産婦が子を生むときまで。そのとき（子が生まれたとき）、彼の兄弟の残りの者はイスラエルの子らのもとに帰ってくる。」（ミカ 5・2）「彼の兄弟の残りの者」ということばは、ヘブライ人への手紙の「事実、人を聖なるものとなさる方（イエス・キリスト）も、聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源（父なる神）から出ているのです。それで、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、『わたしは、あなたの名をわたしの兄弟たちに知らせ、集会の中で

あなたを賛美します。』」（ヘブライ人への手紙 2・11-12）ということばを思い起こさせます。こうして神が私たちのために用意し、預言者の口を通して告げられた、神のことばの実現としての私たちの救いは実現されているのです。

「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いなことでしょう。」今日の福音はエリザベトの聖母へのこの賛辞で終わっていますが、クリスマスの前に、このエリザベトのあいさつを受けた聖母マリアが歌う「マニフィカット」の賛歌をわたしたちも、ともに歌いたいと思います。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神をたたえます。身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」マニフィカットの歌は、ここまでが聖母の独唱で、その後が続いてその先を、わたしたちも聖母のこの賛歌に加わって歌いましょう。「そのみ名は尊く、その憐れみは世々に限りなく、主を畏れる者におよびます。」主のはしためである聖母に御目を留めてくださり、偉大なことをなさってください。主は、そのみ名をもって、主を恐れ尊ぶ者に世々に渡ってその憐れみを注いでくださるのです。

クリスマスの夜、嬰兒イエスのもとに駆けつけた羊飼いたちは、町の外で夜通し羊の番をしていた主を畏れる人たちでした。遠い異国の地からベツレヘムを目指した、異邦人の博士たちも主を畏れる人たちでした。そして物質文明万能の日本の社会に生きる信仰者としての私たちも、彼らの後続く、主を畏れるものたちと言えないでしょうか。

クリスマスの夜、天上の天使たちが歌う「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」というグロリアの歌に応えるように、地上に生きる神を畏れる者たちの、聖母マリアの歌声に続くマニフィカットの歌が響いているのです。

神を畏れる、あるいは主を畏れるとは、今日の福音に照らして言えば、神が約束してくださったことは、必ず実現すると信じることです。目の前の現実がたとえどのようなとしても、主なる神がおっしゃったことは必ず実現すると信じ続けることです。神はそれを実現することが出来る力を持つお方であり、その約束を必ず守られる、愛と誠にあふれたお方であると信じることです。

今日の福音に登場するエリザベトと聖母マリアはまさにそのような人たちでした。子供を産めない女性としてすでに年老いていたエリザベトは、夫ザカリアを通して伝えられた神のお告げを信じ通して、洗礼者ヨハネの母となりました。聖母はヨセフに嫁ぐ前に、おとめのまま神のお告げを受け入れて、救い主の母となりました。聖書に登場する神を畏れる人々にわたしたちが学ぶこと、すなわち、神を畏れるとは、不可能を可能とする神への信仰を生き生きと生きつづける

ということです。そのような姿勢を保って、わたしたちの願いを踏みにじる現実  
に屈することなく、神に希望をおいてわたしたちの今の現実を生きぬくとい  
うことです。

クリスマス、わたしたちのもとに来てくださった主は、その十字架の死と復活  
をもって、わたしたちのこの現実を打ち破り、わたしたちに救いをもたらして  
くださったお方です。だからわたしたちは、そのお方をわたしたちの救い主として  
生き生きと信じ続ける、これがわたしたちのキリスト者としての信仰であり、わ  
たしたちが神を畏れる者であることの証です。そのような生き方に招かれた者  
として、エリザベトがそうであったように、聖母マリアがそうであったように、  
主の約束のことばの実現を信仰のうちに、ひたすらに待ち望みたいと思います。  
それにふさわしい生き方をもって、わたしたちへの主の降誕の準備に励みたい  
と思います。

カトリック高円寺教会

主任司祭 吉池好高

